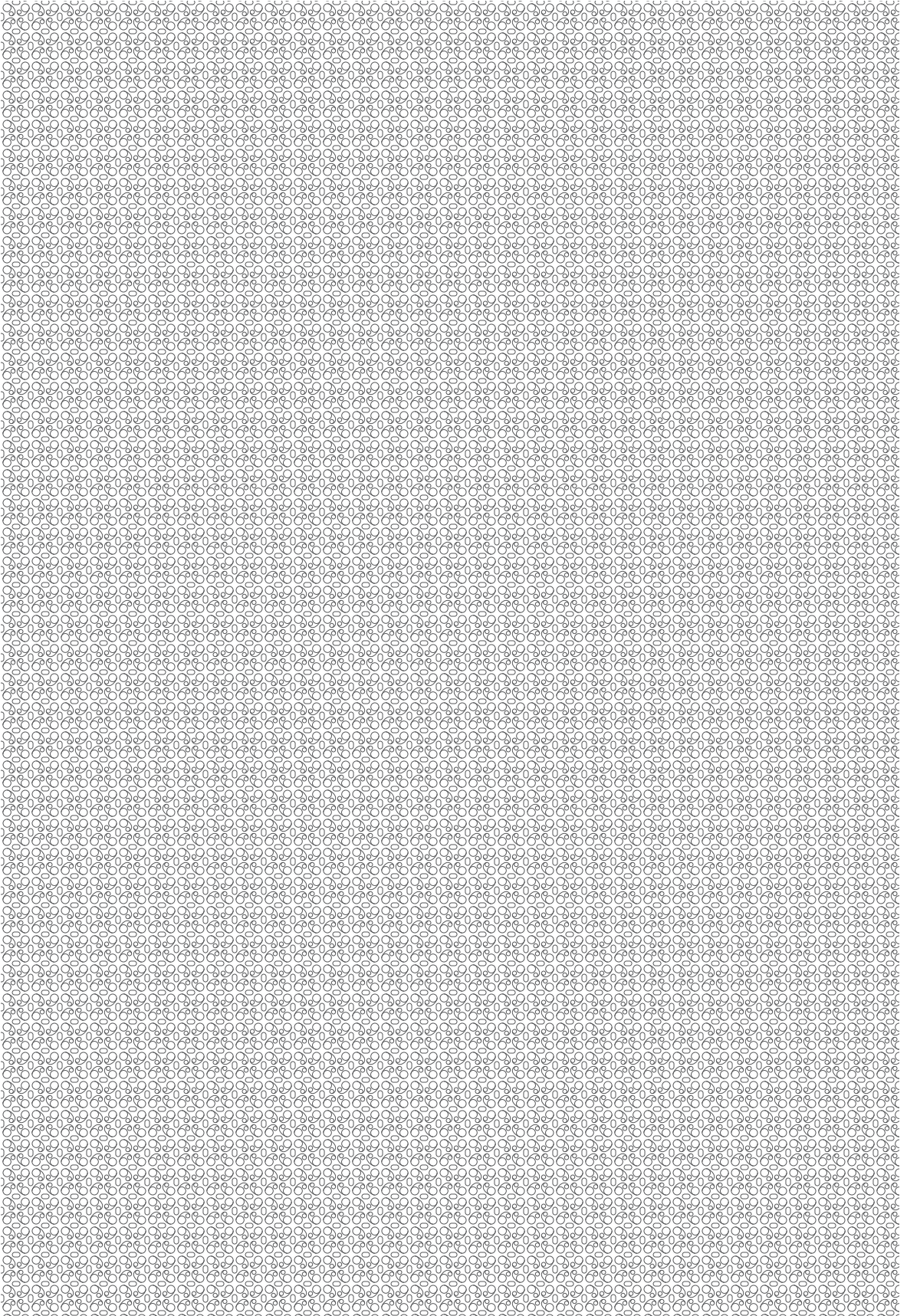


2026年度入学試験問題

国語

(試験時間 13:25～14:25 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は、当該科目の解答は無効になります。



非対称性などの特徴を持つ市場では、社会的に望ましい水準での取引が行われず、効率的な資源配分が達成できません。このような不完全な市場に対しては、政府の介入を通して、最適な水準での取引へ近づける措置が求められます。

スタートアップに関連する、市場の失敗について考えます。第一に、新しい企業の登場は市場における競争を活性化する上で非常に重要な役割を果たすことが知られています。独占や寡占のような市場では、既存企業は競争のプレッシャーを受けにくいため、イノベーション創出の努力を怠るかもしれません。新しい企業の登場による経済活性化は、単にその企業の成功によって成しとげられるだけでなく、さらなる競争に直面する既存企業から引き出されるイノベーション創出の努力によって実現します。何らかの理由で市場への参入がソ⁽⁸⁾ガイされているような状況においては、政府が介入して新しい企業の登場を後押しして競争を活性化しようとする手段は正当であると言えるでしょう。

第二に、スタートアップとステークホルダー（取引先企業、資金提供者など）との間に存在する「情報の非対称性」の問題が挙げられます。市場において複数の当事者間で保持する情報の量や質に格差がある状態は、情報の非対称性と呼ばれています。これも市場の失敗の一つです。驚くべきことではありませんが、スタートアップは自社の事業の内容について情報を有していますが、(9)な資金提供者や取引先はその情報を持っていません。たとえば、個人で住宅ローンを組もうとする場合、貸し手である銀行は、この個人の返済能力を見極めるため職業や収入といったさまざまな情報を収集しようとします。これは個人と銀行の間に、情報の非対称性が存在するからに他なりません。創業間もない企業については、過去に取引履歴がないために情報が得にくく、特に情報の非対称性の問題がケン⁽¹⁰⁾チョになります。

情報の非対称性が生じると、さまざまな問題を引き起こします。まず、資金調達においては、スタートアップが金融機関から資金提供を受けようとする場合、返済能力の低い企業が「逆淘汰」（悪いものが生き残るという意味）され、返済能力の高い企業に十分な資金が行き渡らないという現象が起こります。スタートアップが自らの能力や市場の状況を正確に予測して、必要な資金を資金提供者に求めたとしても、資金提供者がそれを十分に理解して、希望するだけの資金を提供してくれるとは限らないからです。結果として、多くのスタートアップは必要な資金を確保できません。これは資金の取引が行われる「前」に生じる間

題です。

資金取引の「後」に生じるものとして、「モラル・ハザード」と呼ばれる問題があります。これは、資金提供者の期待通りにスタートアップが行動してくれないという利害対立の問題をさします。依頼人である資金提供者と代理人であるスタートアップの間で起こるものであり、エージェント問題と呼ばれるものの一つです。資金提供者は、資金提供先のスタートアップが成長のための努力を行っているか、適切な経営判断をしているかどうかといった情報を十分に得ることはできません。金融機関や投資家はスタートアップの行動を常に監視できるわけではありませんし、監視するにもコストが発生します。こういった(11)なコストの発生は企業にとっては資本コスト（資金調達のためのコスト）となり、さらに資金調達を難しくさせるでしょう。

多くのスタートアップにとって資金調達は最大の課題となります。スタートアップは、創業当初は創業者自身、家族・親族や友人・知り合いからの調達を含めて内部金融に依存する傾向があります。特に、起業家自身が有する財産の大きさは創業の意思決定や創業後の利益（所得）と正の関係があり、裕福な個人ほど、より効率的な水準の資金をもとに創業することができることが明らかにされています。言い換えれば、持っている財産が小さい個人は、資金制約が創業の大きなハードルとなっていることを意味しています。

(12)、個人が創業の意思決定を行う確率が、保有する財産の大きさに依存していることが明らかになっていて、企業の創業資金の大きさは起業家個人の財産規模とともに高くなる傾向があります。起業家自身の資産が創業資金に影響を与えるという事実は、彼らが資金制約に陥っていることを示唆しています。資本市場は、情報の非対称性を背景とした逆淘汰やモラル・ハザードの問題のために、起業家に対して必要な資本を与えてくれません。起業家は、自身で資金調達を行うことで失敗のリスクを負わなければなりません。

情報の非対称性や資本市場の不完全性といった市場の失敗は、スタートアップだけに起こる問題ではありません。あらゆる企業（特に中小企業）においては少なからず起こりうるでしょう。(13)、取引履歴や組織の正統性がないスタートアップに

とってはケンチヨな課題となります。

政府による介入の背景として、情報の非対称性の問題、また、それに起因する資本市場の不完全性の問題は、スタートアップに対する公的支援を正当化するための重要な根拠となるでしょう。同時に、情報の非対称性に起因する資金調達以外の問題（取引先の確保、労働市場での採用活動など）においても、市場に任せてはうまくいかない可能性が高いと考えられます。

（加藤雅俊『スタートアップとは何か——経済活性化への処方箋』による）

（注） スタートアップ……創業間もない企業のこと。

* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線部(2)(8)(10)の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

(2) ト|げる

- A バツハにシンスイ|する
- B 任務をスイ|コウする
- C 会長にスイ|キヨする
- D 重要部分をバツ|スイ|する
- E 率先スイ|ハンする

(8) ソ|ガイ

- A ソ|ヤな振る舞い
- B ハイ|ソ|の努力が実を結ぶ
- C 民俗学のソ|セキを築く
- D ケン|ソ|な山道
- E クウ|ソ|な理論

(10) ケン|チヨ

- A 期待をソウ|ケン|に担う
- B ケン|ジツな方法をとる
- C 使者をハケン|する
- D ケン|メイの努力が実る
- E 財力をケン|ジする

〔問二〕 傍線部(1)「ここで一度立ち止まって冷静に考えてみましょう」とあるが、それはなぜか。その説明として、もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 本来であるならば政府が介入することなく、市場が独力で経済を活性化すべきであり、スタートアップを支援することで政府との癒着をもたらしてしまうから。

B たとえ経済を活性化することが可能だったとしても、政府が一私企業であるスタートアップに公金を用いて支援することは、正当化できるものではないから。

C スタートアップのほとんどが成功することもなく消滅してしまうのが現実であり、実績のある既存企業を支援するほうが経済の活性化につながるから。

D 市場に任せておいてはスタートアップが登場しにくいかもしれないが、市場がおかした失敗の尻ぬぐいを政府が行う理論的根拠を見いだすことは難しいから。

E うまくいけばスタートアップが既存企業を刺激したり、経済を活性化したりできるかもしれないが、税金を用いるだけに支援の目的や手段を確認すべきであるから。

〔問三〕 空欄(3)(9)(11)に入れるのもっとも適当なものを左の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度以上用いてはいけない。

- A 追加的 B 思弁的 C 説得的 D 潜在的 E 恣意的

〔問四〕 空欄(4)(5)(7)(12)(13)に入れるのもっとも適当なものを左の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度以上用いてはいけない。

- A もちろん B あるいは C 実際 D しかし E つまり

〔問五〕 傍線部(6)「スタートアップ支援の正当化の背景」とあるが、どのような背景があるのか。その説明として、もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 市場において複数の当事者間で保持する情報の量や質に格差があることは、スタートアップだけに限らないのに、スタートアップのみが十分な資金を調達できないという背景。

B たとえ資金調達がうまくいったスタートアップであったとしても、創業後においても引き続き、資金提供者に実績などの情報を真摯に提供し続けなくてはならないという背景。

C 情報の非対称性があるため、海の物とも山の物ともつかないスタートアップは資金調達が難しく、イノベーションを創出する可能性があっても市場へ参入しにくいという背景。

D スタートアップの創業者は自らの資金に頼ることなく、まず家族や親族や知人からも資金の提供を受け、さらに資本市場からも資金を借入しなくてはならないという背景。

E スタートアップには「モラル・ハザード」と呼ばれる問題が創業や準備段階からつきまとい、情報の非対称性を解消した上で、資金を調達しなくてはならないという背景。

〔問六〕 本文の内容と合致するものとして、もつとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 企業は自己の利益を上げることが至上目的であるため、市場に任せておいては資源を効率的に配分することは不可能であり、長期的に見れば、市場は失敗する宿命にある。
- B スタートアップとステークホルダーとの間に存在する情報の非対称性を解消することで、スタートアップは資金調達が可能になるため、公的支援を受ける必要がなくなる。
- C スタートアップが自らの能力や市場の状況を正確に予測した情報を、あらかじめ資金提供者に与えてさえいれば、創業後も十分な資金を調達することは可能である。
- D 返済能力の低い企業と返済能力の高い企業が、その能力に応じて資金の提供を受けることができないなど、資本市場には不完全性が存在しているのが現実である。
- E 市場に任せておけばすべてうまくいくわけではなく、「市場の失敗」が存在しているため、政府はスタートアップだけではなく中小企業にも公的支援を行う必要がある。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

経済学者はまず効率性の議論に力を入れ、公平性の話は後回しにする傾向があります。世間の経済論議を聞いていても、そういう話の進め方をする人がよく出てきます。このアプローチを採用すると、たしかに話はすっきりするのですが、すっきりしすぎて、⁽¹⁾カンジンのところが議論からすっぽり抜け落ちてしまいかねません。

ここではその話をしたいのですが、その前に、公平性をもう少し「料理」しやすい形にしておきましょう。つまり、公平性について⁽²⁾両極端の考え方を紹介します。ただし、話を簡単にするために、幸せは所得だけで決まると仮定しておきます。

1つ目の考え方は、社会全体の幸せ——経済学ではそれを「社会的厚生」と呼びます——は、世の中の所得の総額で示されるという考え方です。総額だけが問題なのであって、それが人々の間でどのように分配されているかが気にしません。1人の金持ちに所得が集中し、ほかの誰にも所得が行きわたっていないなくても、その逆でも、中間的な形態でも同じだと考えます。総額が大きければそれによいという考え方です。

経済学では、この考え方を「ベンサム(注)的な立場」と呼びます。ベンサムという人名は、功利主義という言葉とともに高校の公民や地歴の教科書でも登場します。そこで説明されているベンサムの考え方はもつと深淵えんで崇高なものなのですが、ここでは⁽³⁾、右のように特徴づけておきます（ベンサム先生に怒られるかもしれませんが）。

もう1つは、その対極にあつて、社会的厚生は世の中の所得の低い人の所得で決まるといふ考え方です。金持ちがいくらお金を持っていても、社会の豊かさとは関係ありません。社会の豊かさを決めるのは、最も生活に困っている人だと考えます。この考え方をアメリカの政治哲学者ロールズちんに因んで「ロールズ的な立場」と呼びます。

このロールズ的な立場に立つと、所得が完全に平等に分配されていることが最適になります。この点は、次のように考えれば確認できるでしょう。いま、所得が完全に平等に分配されていると仮定します。その状態から少しでも離れてしまうと、社会的厚生を改善できないことを示せばよいでしょう（ただし、社会全体における所得総額は固定されていると仮定します）。

そこで、所得が完全に平等に分配されている状態から、1人だけが所得を増やしたと仮定します。その場合、ほかの少なくとも1人の所得を減らす必要がありますが、そうすると、その所得が減った人の所得が社会的厚生を決定するので、ロールズの立場から見ると、社会的厚生は低下します。

では、1人だけ所得を減らしたらどうなるでしょうか。この場合は、ほかの少なくとも1人が所得を増やせますが、それとは関係なく、この所得を減らした人の所得が社会的厚生を決定するので、社会的厚生は必ず低下します。

以上より、ロールズ的な立場に立てば、所得が完全に平等に分配されていることが必要であることが確認できます。

このように、ベンサム的な立場とロールズ的な立場とは、公平性あるいは所得分配に関する評価の仕方がまったく異なってきます。ベンサム的な立場に立つと、総額だけが問題になるのであって、所得格差はあっても気にしません。一方、ロールズ的な立場に立つと、平等な社会が最も望ましいという判断になります。したがって、

(4) 。

ここで、GDP（国内総生産）の持つ意味を考え直してみましよう。GDPとは、文字通り、その国で得られた生産額の合計ですが、その合計は国民一人ひとりが稼いだ所得の合計でもありません（ここでは、国内総生産と国民総生産の違いは無視します）。つまり、低所得でも高所得でも、個人が稼いだ所得は区別しないで単純に足し上げているわけです。

これは、私たちが国全体の経済的な幸せを、いわばベンサム的な発想で評価していることを意味します。そこには、所得格差をどう評価するかといった公平性の観点は少しも入り込んでいません。効率性の問題を最初に片づけ、公平性の問題を後回しにするという作業を、私たちが暗黙のうちに想定しているからだと解釈してもよいでしょう。

しかし、このように効率性と公平性の問題を二段構えでコウサツ⁵⁾すると、奇妙なことが起こります。効率性の問題を最初に片づけるということは、第一段階において、限られた資源の下で、世の中の所得を最大にすることを目指します。第二段階では、そこで得られた所得を公平性の観点から最適な形で人々に再分配します。このとき、第二段階ではどのようなことが望ましいと言えるでしょうか。

ロールズ的な立場に立つと、これまでの説明からわかるように、所得を完全に平等に分配すべきだということになります。一

方、ベンサム的な立場に立つと、「お好きなように」ということになります。限られた資源の下で、世の中の所得がすでに最大になっているとすれば、その分配の仕方には興味がわいてこないからです。そうすると、政府がロールズ的な立場に立つて所得を完全に平等に分配しても別に構わないということになります。

これは、ずいぶん奇妙な話だと思いませんか。ベンサムとロールズ的な立場とはそれぞれ、公平性をどう捉えるかという点について対極にあるのに、どちらの立場に立つても、所得格差をなくすることが政府の選択する政策になるからです。どちらの考え方を採用しても、人々があくせく働いて稼いだ所得を、政府が全部没収することになります（つまり、所得税の税率は100%）。そして政府は、その没収した所得の総額を、社会を構成する人たちに平等に分配します。このような政策が望ましいとされるのですが、ベンサム、ロールズどちらの立場に立つても⁽⁶⁾こうした結果が導かれるのはなぜでしょうか。

もちろん、こうした完全平等の所得分配に対しては、「所得を得られなかった人にとってはありがたいだろう。しかし、頑張つて働いた人は税金をガツポリとられてやる気を無くすのではないか」という懸念が当然出てきます。そして、そのような懸念は、経済学的に見てもまったく正しいものです。しかし、そうした懸念があるにも拘わらず^か、完全平等の所得分配がベンサム的な立場からも積極的に否定されなかったのはなぜでしょうか。

それは、そうした完全に平等な所得分配を目指したときに、人々の行動にどのような変化を及ぼすかを考慮に入れる仕組みが、議論の中に用意されていないからです。言い換えると、効率性の話を初めに片づけ、それを与えられたものとして、公平性の話で所得再分配のことを議論し、それでおしまいにするという構造を、この議論がはじめからとっていたからなのです。

(7)、そうした大胆な所得再分配をすると、人々のやる気（労働意欲）に変化が生じ、働いて得られる所得にも影響が出てきます。あまりに⁽⁸⁾ロコツな分配であれば、働く意欲が落ちる人が続出して社会全体の所得の総額が減少してしまいます。そうになると、公平性の観点から、とりわけ、低所得層を支援する目的で所得再分配を行おうとしてもブレーキがかかります。これは、効率性の観点から見ると決して無視できないところです。

しかし、右の議論では、人々が経済活動を行って所得を得るというプロセスはすでに終わっています。得られた所得をどう再

分配するかという問題だけが残っているのです。したがって、ここでは効率性の問題は議論する必要がなく、もっぱら公平性の問題を考えればよいことになっています。そうすると、公平性の観点からしっかりモノを言いたいロールズの立場が、どうしても前面に出てきます。経済活動が終わり、所得の総額も確定しているので、ベンサム的な立場からは、「こちらから言いたいことは特にありません。お任せします」といった意見しか出てきません。

(小塩隆士『経済学の思考軸——効率か公平かのジレンマ』による)

(注) ベンサム……イギリスの哲学者、経済学者、法学者(1748～1832)。

* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 傍線部(1)(5)(8)の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

(1) カン|ジン

- A 細心さがカン|ヨウである
- B あのシーン|はアツカン|だった
- C 世界にカン|たる技術
- D 情勢をカン|アンする
- E 業務をイカン|する

(5) コウ|サツ

- A 野外でサツ|エイする
- B 危険をサツ|チする
- C 乗客がサツ|トウする
- D カイ|サツ|で待ち合わせる
- E 体制をサツ|シンする

(8) ロ|コツ

- A ゴ|ロ|がいい
- B リ|ロ|整然と話す
- C ワイ|ロ|を贈る
- D ロ|シン|が融解する
- E ロ|メイ|をつなぐ

〔問二〕 傍線部(2)「両極端の考え方」とあるが、それはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A ベンサム的な立場では幸せは社会の所得の多寡で決まるが、ロールズの立場では個人の所得の多寡で決まるということ。

B ベンサム的な立場では社会的厚生など考慮に入れないが、ロールズの立場では社会的厚生をもっとも優先するということ。

C ベンサム的な立場では最初に公平性、次に効率性という順に論ずるが、ロールズの立場ではその順番が逆になるということ。

D ベンサム的な立場では所得格差に焦点を当てないが、ロールズの立場では所得格差の解消を第一義とするということ。

E ベンサム的な立場では個人の幸せは目指していないが、ロールズの立場では社会全体の幸せを目指していないということ。

〔問三〕 空欄(3)(7)に入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A (3) 立场上 (7) 正確にとらえれば

B (3) 都合上 (7) 色眼鏡で見れば

C (3) 教育上 (7) 可能であれば

D (3) 理論上 (7) 悪意にとらえれば

E (3) 便宜上 (7) 本来であれば

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A ベンサム的な立場をとるならば、効率性が問題にならないように思います
- B どちらの立場をとるかで、結果に大きな違いが出てくるように思います
- C ロールズ的な立場をとるならば、公平性が度外視されるように思います
- D どちらの立場をとるにしても、国民の幸せを考えていないことになると思います
- E どちらの立場にとっても、所得を平等に分配することになると思います

〔問五〕 傍線部(6)「こうした結果が導かれるのはなぜでしょうか」とあるが、筆者はなぜだと考えているのか。その説明として

もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 所得格差の解消を目指している政府は、大胆な所得分配が人々にどのような影響を及ぼすかが予想できなかったから
- B 効率性を議論するよりも前に公平性を本来議論すべきであったのに、その順序が逆転することになってしまったから
- C 効率性と公平性は互いに関係し合っており、別々に論じないほうがよかったのに、二段階的に処理してしまったから
- D 完全平等の所得分配を目指す公平性の観点は理想的ではあるが、効率性の観点からブレーキがかかってしまったから
- E 個人ではなく社会全体の所得の総額を確定することは不可能であるのに、それを前提に公平性を考えてしまったから

〔問六〕 本文の内容と合致するものとして、もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A ベンサム的な立場よりもロールズ的な立場のほうが、社会全体や個人の幸せについて、より考えていると言える。
- B 経済学という学問は、公平性よりも効率性をまず考慮するというきらいがあるが、そこには盲点が存在している。
- C 社会についてベンサムは経済学的に、ロールズは政治学的に捉えており、議論が噛み合わず水掛け論に終わってしまった。
- D 所得が完全に分配されていることが現実起こることなどありえないので、経済学は机上の空論だと言われる。
- E 幸せは所得だけで決まるわけではないので、公平性を議論する際に、所得の多寡を基準にするのは間違いである。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

政治的中立という規範が侵害されることに対して、今日の日本では強い反発がある。中立であることで、「悪」を黙認してしまふことがあるにもかかわらず、その懸念よりもはるかに、中立でありたい、そして中立であるべきだという傾きが強い。この傾きをどのように考えたらよいのだろうか。

この傾向を考えるうえで、ドイツの文化社会学者アンドレアス・レックヴィッツの『シンギュラリティーズの社会』が参考になる。彼は現代をシンギュラリティー（個別性）によって特徴づけている。シンギュラリティーという用語は、AIが人間の知能を超える技術的特異点という意味で用いられることがあるが、レックヴィッツの場合は、そのような意味ではない。大量生産と官僚制を特徴とする近代が一般性の時代だったとすれば、現代は、それぞれ比較不可能な、さまざまなシンギュラーなもの時代になっている、と彼はみる。シンギュラリティーズ（複数形）は、^(注1)宇宙重規の「〈私〉時代」にも通じる。また、その基本的な視点は、^(注2)ゲオルク・ジンメル「主観的文化」にまでたどり返すことができる。

このような用語法に対しては、シンギュラリティーズなどという、耳慣れない新しい言葉ではなく、個人や個人主義のような既存の用語を用いればよいのではないかという反論もあるかもしれない。しかし、共同体からの個人の析出や、アトム化した個人などの表現をみればわかるように、個人や個人主義は、共同体との（対抗）関係で用いられることが多い。こうした表現では、多様で複雑な共同性と関係しながら立ち現れる、個々の経験、ライフスタイル、そしてアイデンティティのユニークさを表現することが困難になる。現代の個人のアイデンティティは強い主体性ではなく、かなり流動的で脆弱である。このような状況を際立たせるために、レックヴィッツは個人主義のような既存の用語をあえて使わずに、シンギュラリティーズをキーワードにしている。

このキーワードから彼は、旅行、ライフスタイル、雇用環境、さらには政党政治に至るまで、幅広く包括的に現代社会を論じる。この本はブーアカンプ社から刊行されているポリュームのある学術書ではあるが、オラフ・シヨルツ首相やローベルト・

ハーベック経済相など、ドイツの政治家によってよく引用されてもいる。政治家が文化社会学の学術書を読むというのは、日本ではありえないかもしれない。しかし、考えてもみれば、現代社会を(1)に把握することなくしては、個別の政策を語ることはできない。そうであるとすれば、問われるべきはドイツの政治家の読書傾向ではなく、日本の政治家のそののほうかもしれない。

さまざまな個性が重視される時代には、人生はキュレーション的になる、とレックヴィッツは書いている。美術館のキュレーターがするように、知識とセンスによって筋道を立ててモノや情報を集め、配置・配列の仕方によって、それらに新しい意味を持たせる。情報をただ並べるのではなく、配置・配列の独創性と創造性に価値が置かれる。AO入試の面接から葬式の形式まで、私たちはこうした日常生活を生きている。

このような社会では、多様な他者や文化を否定せず、自身との個別的なつながりを大切にすることで態度が生まれる。そして一律的で、固定的で、凡庸な基準の押し付けは嫌われる。近年、とりわけ若い世代で、性的指向など、さまざまな多様性を尊重すべきだという意識が強くなっているのも、こうした傾向と無関係ではないだろう。

しかしながら、⁽²⁾同じ思考はオーソドックスではない歴史認識への「理解」にもつながってしまいかねない。戦後七五年をめぐる日経新聞の特集記事で、次のような傾向があることが紹介されていた。「戦後七五年を過ぎ、過去の戦争や悲劇の歴史について、若者が簡単に肯定的な姿勢を示すケースが目立っている。真偽不明のSNS（交流サイト）の投稿に大量の「いいね」が付いたり、戦争は「仕方ないこと」と捉えたり」^(注4)することが多くなったというのである。

「他者を他在において把握する」。これは丸山眞男が好んで用いたフレーズである。ただし、こうした姿勢は、用いられ方次第では、メインストリームの歴史認識では無視されるか否定されるかする事実に対しても、寛大な態度をとることにつながる。こうして独裁者の知られていなかった美談などが拾い上げられてくる。(3) なナショナル・ヒストリーからこぼれ落ちる

ものを丁寧^(注5)に扱う態度は、あぶなっかしいまでにさまざまなものを掬い上げてしまう。【I】 マックス・ウェーバーであれば、そうした諸々の見方を「無矛盾」な仕方で制御しようとする。さまざまな対立するものの見

方が存在することは認めつつも、彼はそれでも主体として「内的一貫性」を確保しようとした。学問という仕事（ペルーフ）がそれを学ぶ者に提供できるものは、結局は「明晰さ」であると彼がいうとき、ある特定の価値に矛盾することなく、一貫してコミットすることが想定されている。【II】

この点では丸山も同じである。彼が求めたのは、他者感覚を有すると同時に、「」であった。『自己内対話』では、次のように述べられている。

自己内対話は、自分のきらいなものを自分の精神のなかに位置づけ、あたかもそれがすきであるかのような自分を想定し、その立場に立って自然的自我と対話することである。他在において認識するとはそういうことだ。

これに対して、⁽⁵⁾シンギュラリテーズの時代の自己は統合性が弱い。自分のなかで批判的な対話を継続するよりは、「あれもこれも」包摂しようとする。批判的な対話では矛盾とみられる諸要素も「いろいろなオピニオンがある」ということで受け入れられていく。【III】

相対化に伴う問題は、かつて西ドイツの「歴史家論争」でも論じられた。ホロコーストという人類史上最大の犯罪行為を相対化し、いつの時代のどこの国でも存在したような数多くの不幸な出来事の一つとしてこれを「些細」なものともみなしてしまうことは、やはり許されるものではない。【IV】

しかしながら、こうした批判が厳しい口調になると、他者を認めない「偏狭な」態度の表れとして、かえって忌避の対象になる。リベラルな奴ほど非寛容で、「内ゲバ」体質だというような言説は、「政治的に中立でいたい」と思う人に、それだけいつそう受け入れられやすい。こうしてまったく悪意がない仕方で、「教科書では取り上げられない真実」が流通してしまふ。【V】

今日、とりわけ政治的中立が強調されるのは、こうした文脈で理解できる。特定の政治的な立場性を明確に持っている人、あるいは「政治思想が強い」人は、そうであるというだけで、個別のな生を生きている人にとっては脅威に感じられる。ある政治

的争点をめぐって、「あれかこれか」の決断が迫られる状況は忌避される。さまざまな対立に主体的に関与するというのではなく、多様性が強調される。こうしてフラットで中立的な関係性が好まれるようになる。

(野口雅弘『中立とは何か マックス・ウェーバー「価値自由」から考える現代日本』による)

(注1) 宇野重規……政治学者(1967)。

(注2) ゲオルク・ジンメル……ドイツの哲学者、社会学者(1858～1918)。

(注3) キュレーター……展覧会の企画、構成、運営などをつかさどる専門職、管理者。

(注4) 丸山眞男……政治学者(1914～1996)。

(注5) マックス・ウェーバー……ドイツの社会学者、政治学者、経済学者(1864～1920)。

* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

〔問一〕 空欄(1)(3)に入れるのもっとも適当なものを左の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度用いてはいけない。

- A 現実的 B 有機的 C 合理的 D 画一的 E 俯瞰的

〔問二〕 傍線部(2)「同じ思考はオーソドックスではない歴史認識への『理解』にもつながってしまいかねない」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 内面で批判的な対話を行ったり、主体的に関与したりすることなく、すべてを包摂しようとするから。
B 絶対的な価値観がなくなり、価値の相対化が起こり、善悪の判断を下すことができなくなっているから。
C 自らの精神的な統一性を崩すことなく、多様な他者や文化を肯定的に捉えようとする傾向があるから。
D 何が真で何が偽であるかは不明であるため、固定観念にとらわれずに、自己の基準に即し判断するから。
E メインストリームの歴史認識では拾いきれない事実を、真の歴史があるという歴史観を持っているから。

〔問三〕 空欄(4)に入れるのもっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 異常に自己肯定感が高い主体
B 強靱な自己制御力を具した主体
C 的確な自己分析を行う主体
D 容赦のない自己批判を繰り返す主体
E 巧妙な自己暗示をかける主体

〔問四〕 傍線部(5)「シンギュラリテイズの時代の自己」とあるが、それはどのような自己か。その説明としてもっとも適当なものの中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 強い主体性がなく、統合性は非常に弱い、自己内対話を繰り返し返すことで、寛大な態度をとることができる自己。
- B 特定の政治的な立場性を明確に表明することなく、多様な意見を精査することで、態度を決定しようとする自己。
- C 多様で複雑な共同性と関係を持ちながらも、個別性を大切に、自らの獨創性や創造性を表現しようとする自己。
- D 一体的で、固定的で、凡庸な基準の押し付けを断固として拒絶して、リベラルな立場を貫きとおそうとする自己。
- E 偏狭な態度をとることなく、政治的に中立であることを希求し、世界が平和であることを切に願っている自己。

〔問五〕 次の一文を入れる箇所としてもっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

したがって、こうした歴史修正主義的な言説に対しては、専門の歴史家などから厳しい批判が加えられることが多い。

- A 〔Ⅰ〕
- B 〔Ⅱ〕
- C 〔Ⅲ〕
- D 〔Ⅳ〕
- E 〔Ⅴ〕

〔問六〕 本文の内容と合致するものとして、もっとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A マックス・ウェーバーや丸山眞男は、多様な他者や文化を寛大な態度で受け入れた現代人の先駆けであった。
- B 多様性が強調され、フラットで中立的な関係性のもとで、自己を築き上げることを目指さなくてはならない。
- C 美術館のキュレーターのように知識とセンスを持ち、感性豊かに生きていくことに価値を置くのが現代である。
- D シンギュラリテイズという用語は現代を表すキーワードであり、個人主義という用語を淘汰してしまった。
- E 政治的中立という規範が強く作用することは、一見すると肯定されやすいが、そこには問題がはらまれている。

